

産学連携授業における学習コミュニティのデザイン

—京都精華大学人文学部「広告表現技法」を例にして—

筒井 洋一*

Email: ytsutsu.i@gmail.com

*: 京都精華大学人文学部

◎Key Words 実践コミュニティ, 産学連携授業, デザイン

0.はじめに

グローバル化や急速な技術革新が進行する中で、技術や知識の更新スピードが高まり、知識やノウハウの陳腐化が早まっている。大学教育においては、教員から学生への知識伝達型の講義よりも、問題解決(Problem Based Learning; PBL)的な授業の重要性が高まっている。

そうした授業方式をとる場合には、それぞれの分野での実践知と理論知とを合わせ持った非常勤講師、ゲスト講師、受講生との連携が不可欠になる。本発表では、京都精華大学人文学部「広告表現技法」を例にして、この授業が E.ウエンガーらが定義する「実践コミュニティ」の原則を持っていることを指摘する。

1. 授業の特徴

京都精華大学人文学部では、四年前から非常勤講師による授業「広告表現技法」が行われている。土曜日午後に三コマ連続で開講される。過去三年間の受講生は、80~120名(2009年80名、2010年100名、2011年120名)であり、京都精華大学生よりも、他大学生の参加が多い。これは、京都の大学間では単位互換制度が整っており、他大学で開講される授業に参加しやすいからである。

前期は、毎回ゲスト講師(コココーラ宣伝部クリエイティブ、ダイヤモンド社編集長、元絢香・SUPERFLY音楽プロデューサー、MEN'S CLUB編集部長)が登壇して、講師の問題提起を展開し、ゲストから出された課題に対して学生が提案する。後期は、約30名の受講生に限定して、デビュー直後の女性アーティスト(ユニバーサルミュージック所属)のプロモーションを担当するプロジェクトを展開した。最終成果物は、学外での野外ライブ、フリーパーパー3種、プロモーションムービー3本、『京都新聞社』夕刊見開き二面記事を元にした特設サイトを立ち上げることである(1)。

3. 授業のコンセプト

非常勤講師である博報堂所属コピーライターの佐々木圭一は、二つの授業目標を設定している。一つは、自らの生き方を提示することで、学生の生き方のロールモデルとなることである。コピーライターとして活躍している彼であっても、学生時代までは、うだつが上がらず、他人とのコミュニケーションもままならなかった。それがいくつかの出会いの中で、自らの行動

規範を変化させて、夢の実現に転換したのであった。

もう一つは、学生が夢を目指し、それを行動へと転化させることである。このために、前期には、学生自身が夢を設定して、その実現に向けた行動の検証をおこない、後期には、少人数のグループに分けて、専門家と一緒にプロジェクトを創造したのである。

4 学習コミュニティのデザイン

「広告表現技法」で形成されたコミュニティは、他の授業やプロジェクトと比べて、学生の関心や熱意がきわめて高く、授業プロセスのどの段階においても継続され、最終成果物もかなり高いクオリティーが発揮され、授業外においても学生の行動力や発信力は顕著であった。そうしたコミュニティがどうして形成されたのかを、E.ウエンガーらが『コミュニティ・オブ・プラクティス』の中で提唱している、実践コミュニティの概念から考える。

実践コミュニティとは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団(2)」であると定義している。講師の役割は、こうした実践コミュニティを育成し、学生の自発的な活動を育成することである。そこで、実践コミュニティ育成の七原則(3)に則しながら、授業設計について論じる。

4.1 進化を前提とした設計

四年間継続していたこの授業では、前年受講生有志、講師、教務課、専任教員が授業運営に関して相談し、授業支援者的な役割を果たした。そうした少数のコアメンバーが母体となって、新規受講生を巻き込む中でアクティブグループ、周辺グループへと進化していくのである。

授業内容は、講師自らが自分を変えるという目標を設定して、学生自身の転換を求めるものである。これによって、授業と学生との距離が一気に縮まり、授業への関与度が高くなる。

4.2 内部と外部の視点

優れたコミュニティを設計するためには、インサイダーとアウトサイダーの視点を持つことが大切である。インサイダーとしては、講師や受講生が該当する。昨年度受講生は、単位修得後も自らのチャンスを広げるためにも参加するが、今年度受講生と同じ形ではなく、むしろ授業支援者として外から授業を見る立場にある。ゲスト講師も外部の視点で参加している。

4.3 様々なレベルの参加

活発なコミュニティを作るために、講師がコーディネーターとして授業およびSNSでも指導的役割を担っている。講師の魅力は、広告業界の最先端であるより

も、むしろ大学生の仲間という形で関わることにある。

昨年度まで、および今年度の受講生の中で中心メンバーがコア・グループとなって、授業運営を担い、同時に、SNS 内での提案や意見の書き込みをおこなう。前期の受講生 120 名中 10 名程度がそれに該当する。その周辺には、コア・グループを取り巻くアクティブ・グループが存在する。前期受講生の中で、30 名程度がそれに該当する。彼らは、授業の中で積極的な貢献をしたり、SNS 上での書き込みをおこなう。

コミュニティーの大半は、上記二グループほど活動的ではないが、周辺グループと呼ばれる広範な層が存在する。前期の受講生 120 名中 80 名程度がそれに該当する。出席率が低い学生は 30 名程度いるが、そのほとんどは他大学生である。他大学への通学に困難を感じていると思われる。

後期は、具体的なプロジェクトをおこなうために、強い受講意欲を持つ正規受講生 30 名、非正規受講生 20 名に限定した。そのため、コアグループ 10 名以外は、アクティブ・グループと周辺グループとの相違がほとんどなくなった。

4.4 公と私それぞれのコミュニティー空間

前期・後期ともに、5 回ずつの授業以外にも、コミュニティー内でのつながりは強固である。役割分担として、ライブイベントチーム 1 組、フリーペーパーチーム 3 組、プロモーションビデオチーム 3 組、京都新聞記事チーム 1 組に分かれた。成果物のレベルがビジネス用途レベルを求められたために、専門家による指導を元にしたかなり密度の濃い時間を過ごすことで、人間的なつながりができあがっていった。

そのため、チームのリーダーは、講師などとのオンラインでのやりとりをするが、それ以外にもチーム毎の会議が頻繁におこなわれた。大学を越えたチーム編成なので、対面の会議以外にスカイプ会議が多用された。こうした公的私的なつながりがプロジェクトの達成に不可欠であった。

4.5 価値に焦点を当てる

前期当初は、自夢の実現というテーマに全力を注いだ。それによって、授業と自身との関連が明確になり、授業への関心が高まる。授業への関心が最も高まった授業の最終段階に、後期のプロジェクトが発表され、それへの期待が一気に高まったのである。

特に、他大学生は、この授業で学んだことを他の活動に生かそうという意図が明確である。典型的なのが、ある他大学の女子大生である。彼女は、フリーペーパーチームの責任者であったが、そこで学んだ編集技術や印刷所との交渉経験を、学内で発行予定のトランスジェンダー向けの雑誌制作に生かそうとしていた。そのため、すべてのメンバーの作業をフォローし、互いの連絡を密にして、最終制作物の完成まで責任を持とうとしたのである。このように受講生がこの授業を体験することで、自身の活動や

問題関心へとつながることを広げようとしている。

4.6 親近感と刺激を組み合わせる

授業では、受講生自身の夢の実現に取り組むことで、相互の親近感が生まれた。同時に、前期に毎回広告・メディア業界のゲストとのコラボレーションを体験したり、後期には、ミュージシャンのプロデュースというプロジェクトを設定し、ライブコンサートを実現するという非常にインパクトのあるイベントがおこなわれたことで関心がさらに深まった。

この授業の活躍を聞きつけた地元新聞社が、この授業を読者に紹介するために、夕刊の見開き二面のスペースを学生に提供したことによって、さらに加速した。もちろん、わかりやすい記事作成のためには、講師やゲストの専門的なアドバイスが不可欠であった。しかしながら、合宿による編集会議などを経たことで、学生の能力は一気に高まったのである。

4.7 コミュニティーのリズムを作り出す

前後期ともに、授業は、5 回ずつ、土曜日午後 9 時 30 分 X3 コマ開催された。1 コマ目は、講師の授業であり、夢を実現する生き方について語り、2 コマ目は、ゲスト講師が自身の仕事を話、3 コマ目は、ゲスト講師が出したテーマについて、アイデア創出ワークをおこなうという授業である。後期は、プロジェクトの具体的な制作実習であり、土日連続での合宿もおこなわれた。

ルーティーンとしての授業とは別に、ミュージシャンが大学にやってきて、フリーペーパーやビデオ作品用の撮影をしたり、学内でのライブイベントを主催したり、新聞社の編集会議に参加したりという特別な機会に向けたチーム活動が活発となった。

これらを組み合わせることによって、「多くの異なるアイデアに触れる刺激と、親密な人間関係が生み出す心地よさとの釣り合いを取ることができる」のである。

以上のような原則に極めて忠実に進められた授業であるが、そこからどのように受講生が自律的な発展をしていくのかは今後の課題である。

結論

学習コミュニティーの設計においては、授業目標を明確にすべきであるが、同時に、メンバーの発展と共に、柔軟に設定すべきである。この授業の場合、授業当初には、講師と学生との距離感や行動規範についての共有が密接におこなわれた後で、最終制作物の完成という目標へと転換されている点が特徴的である。

それは、目標達成への最適解を求めるのではなく、メンバーの意欲を喚起し、関与をいかに促すのかということである。関与度が深まることによって、逆に目標への関心が高まるのである。

参考文献

- (1) 最終成果物は、以下のサイトに掲載されている。
<http://jb.kyoto-seika.ac.jp/koukoku/安田奈央京都精華大学プロジェクト/>
- (2) E. ウェンガー他著：“コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践” p.33, 翔泳社(2002).
- (3) 同、第三章参照。